

「書き手」の成功と作家

— シュティフターの『水晶』について —

「書き手」ということばは、案外誤解されているとい
うことが分かってきた。きっかけは「語り手」の方のこ
とで、あるとき「源氏物語の語り手は…」という話をし
ていたら、それが紫式部のことと受け取られてしまった
ことにある。しかしこれは「…とぞ、言い伝えられたとな
む」というように言い伝えられた世界に彼女本人が居た
わけではないから、勿論単純な錯覚である。だがその後見
ていると、ある作品の「書き手」と作家とは結構混同し
て把握されているようなので、ここではなるべくすつき
りとした説明を考えてみたい。⁽¹⁾

例としてはシュティフターの『水晶』を取り上げるつ
もりだが、まずこの「シュティフター」と言われている
存在について見てみる。

尾 方 一 郎

たとえば、一八四〇年の春、シュティフターのポケッ
トに入っていた書きかけの原稿を見たある少女が（しか
し、なぜそんなものをポケットに突っ込んで人の家に行
ったのだらう）、それを引き出して読んで賞賛し、結局
そこからシュティフターの作家人生が始まったという、
嘘のように出来過ぎのエピソードがあるが、そこでその
原稿に書かれたものを読んだ少女が感心したのは「書き
手」に対してであらう。彼女がもし伝えられるように
「シュティフターさんは…」(„Der Stifter…“)とこう主
語でそれを言い始めたとしたら、それは彼女の速断であ
る。彼のポケットに入っていた原稿は、彼が書いたもの
とは限らないのだから。いや、少女はひょっとすると彼
の字をよく知っていて、彼が書いたものだということば、

字を見れば即座に判断できたのかもしれない。それでもそのお話を、普通我々が〈XXがこの小説を書いた〉と言う意味で彼が書いたとは限らない。我々はそう言う時には、作家という人種なりその卵という範疇があるとしてそれに属する人が、何かを丸写しにしたのではなくオリジナルなものとして創作した、ということを含意させている。だが彼女が見たシュティフターの原稿はどうだろうか。それは彼の字で書いてあったかもしれない。だがそれが右のような意味で彼が〈書いた〉ものであった保証がいったいどこにあるというのだろうか。

もっともそのエピソードによれば、彼はその原稿をその場で朗読することになり、それを聞いていた少女の母、ミンク男爵夫人が雑誌に紹介し、その短篇「コンドル」が好評を得た、そしてシュティフターに詩人としての道が開けたとのことである。このことをもって「シュティフターはやはりその原稿の書き手であった」とする言いかたもあるかもしれない。しかし別の見方からすれば、シュティフターは、そこでその〈原稿〉を読んだのであり、その原稿が雑誌に紹介され、その原稿が好評を得たのである。

ここでその好評を得た原稿には現実のシュティフターが強く結び付いているかもしれない。しかし実際には、まず「書き手」というものを想定するのが、妥当なやり方だと筆者は考える。そこで実在の作家(あるいはなりかけの)アーダルベルト・シュティフターという人物を結びつけることは、いわば探偵の仕事のような面を含み、その「書き手」の書いたものについても言うという事とは別種の手続き、別種の動機等々を必要とするものではないだろうか。

この書き手というのは、歴史的世界と作品世界の丁度界面に居る。ある固有の言語で書かれているとか、ある出版社から刊行されている(ある写本の形で残っている)という点では歴史世界に面を向けているが、作品内世界を統率しその強固な限界を成しているという点では、作品内世界に面を向けている。

しかしやはりこの「書き手」は、作品外世界、端的に言えば我々読者にいろいろな影響を及ぼすものである。そしてその影響が最も大なのは、その「書き手」の書いたものを前にして、自らの(人間的というか何と言うか)小ささを思い知らされるときである。

誰かある書き手が何か素晴らしい書き方をしている時、
(「こんなことは私には書けない」と思うことがある。それは内容的に書けないということもあるが、そもそも自分が自分という人格にそういうふうを書くことをどうしても(身体的抵抗でもあるように)許せない場合もある⁽³⁾)
この抵抗と言うのは内から鍵のかかったようなもので体の何らかの意味での全体的変容がなければ、それが開く事はない。

しかしこれを逆に考えて見ると、書き手と言うのは、現実の作家にとっては、ある装置になりうるのではないだろうか。つまり(自分のことから他人の事を憶測してはいけなかもしれないが)作家と呼ばれる人々にも、こうした内側からの掛け金が掛かっているかもしれないが、書き手という装置、あるいはもう少しはっきりいえば人格を表に出す事によって、そうした掛け金から切り離された身体を作り出す事もできるのではないかということである。

例えば時代としては理想主義なんて「ちゃんちゃらおかしい⁽⁴⁾」という状況の中に住んでいて、自分の体の中にも、理想を唱えるなんていうことに対しては、強固な掛

け金が掛かっていると。だが、その一方で、もう一つ已むに已まれぬ気持ちとして、理想を追求したい情熱が心の中で赫々と燃えていたらどうであろうか。

もちろん、そうした理想を作中の語り手に語らせることもできる。例えば所謂プラトンの著作では、中でソクラテスという語り手がいろいろと理想主義的な事を述べているが、これはプラトンがどんな下らない状況の中で生きていても、語らせることのできる台詞であろう。しかし、ここで書き手プラトンに眼を転じてみるとどうだろう。(プラトン学者には自明のことかもしれないが、筆者はそれが専門ではなく、また論の都合からわざと何も調べずに続けるとすると)、書き手プラトンは、ただ単に師匠ソクラテスという人物の言行録を残したくて、忠実にそれをまるでテープ起こしのように(もちろんいろんな記憶という装置を媒介してはいるが)書き留めたのか、あるいはまったくこのソクラテスというのが捏造された人格で、書き手プラトンの言いたい事を代弁しているだけなのか、そんなことは、テキストだけを眺めていても分かりはせず、他のいろんな史料やテキストをひき比べてようやく推測ができるようなものである。

しかしいずれにせよこのプラトンという「書き手」については、少なくとも比較的単純なレベルでは、多分イデアアリスムスというか何というかそうしたものを何とか伝えたかったんだな、ということとは、ただプラトンの「著作」だけを読む読者にも分かるような事である。

これに対して訳が分かりにくいのは、所謂近代小説の「書き手」である。これももし猫の躰け方や着物のシミの抜き方といった文章なら、自分が有益な情報を持っているので広く世間に知らしめ、ひいては多少なりとも自分もその対価を得たいと思っっているんだなというような推測(憶測?)はできる。

しかしそうではなく作り事(らしい)事をわざわざ刻苦精励して(いるらしく)書いて、しかも余程の事がなければその「書き手」に世俗的メリットもなさそうなのに、なんでこんなものが書きたいのだろう? これはとてもシンプルで根本的な疑問である。そしてそこで考えられる一つの解は、先の身体的抵抗から解除された身体を創るためではないかという推測だが、それにしても何故抵抗を解除しないとけないのか分からなければ、不思議の形が変わっただけである。

この疑問を解くための接近法は大きく分けて二つあるだろう。一つはそのテキストを読んで自分がどう感じたか、から考えて、その「書き手」の内面を忖度するといふやり方である。もう一つは、シュティフターという著者の〈作品〉だとして、そのシュティフターという人について徹底的に調べてみるという方法である。もしその著者がまだ生きている人ならば、押し掛けて行ってインタヴューをしてみてもいいだろう。勿論すぐ素直に話してはくれないかもしれない。そうしたら何度も通って酒場に引きずり込んで、ついには思っている事を腹の底まで言わせてしまう事も、場合によっては出来るかもしれない。

だがこの二つの方法には決定的な相違がある。前者はいわば作品内の世界から攻めて行って、現実界への界面に出ようとする時、その時界面に張り付いている「書き手」を内側から眺める事で何とかしようとするもので、現実界には決して一步も踏みだす事はない。一方後者は、どこまで行っても現実界の中だけを歩く事になる。たとえその〈著者〉なり〈作家〉なりが、現実的にもどんなに物凄い〈文学的〉世界の中に生きているにしても、彼

や彼女が住んでいるのは絶対に作品の中の世界ではなく、つまりは先程の界面の外にすぎない。従って、いくらその人物に心の底まで吐露させたとしても、あるいはさらにその人物の無意識的部分までを探究したとしても、ある文学作品の世界が界面を持っているとすれば、(とうか、印刷されて本に入ったりしているものは、どう考えてもその事自体で界面の中に入ってしまうのだが)、その外側に留まらざるを得ないのだ。

さていよいよ具体的に『水晶』の物語に話を移すが、この物語がどういう性質のものかという点については、筆者には、子供たちが雪山に迷って救出されるという経過をたどる死と再生の物語であり、またその再生によって、それまでは何となく村人と馴染めなかった兄妹とその母(つまり靴屋の妻)が本当に村人と馴染めるようになったという事は、我々は人間の共同体の中に産み落とされ存在であり、その限りに於いて自己の存在を得るのであって、何らかの原因で齟齬が起きている場合には、再度其処へ生まれ直さねばならないのだという事を、非常に bildlich に描いたものだ、という風に見えて仕

方がない。だがこの辺はすでに論じられている所でもあり、⁽⁵⁾それをここで更に繰り返す必要は感じない。

付け加える必要を感じるとすれば、この物語が(一)ある二日と一晚の物語、(二)それを包む靴屋一家と村人たちとの関係、の枠の他に、(三)それを包む、村と自然の描写という枠、(四)それを外からさらに包む、「クリスマスとは……」という枠があって、(三)と(四)はこのテキストの終りで具体的な言葉を持ってはいないが、しかし言わば零記号を以って閉じている、即ちこの短篇は四重の入れ子構造になっているように、筆者には読めるという事である。そう思える理由は以下で折々に触れることになろう。⁽⁶⁾

それより筆者が関心を持つのは、この「書き手」(勿論これは作品世界中から眺めた書き手である)が、なぜこんなものを書きたかったかという事である。いや、こんなものという言い方はおとしめているように響くかもしれないが、実は筆者はこの作品に結構、あるいはかなり、いや相当感心している。しかし、というよりは、だからこそ、何故この作品を「書き手」が書きたかったのか、よく分からず、探してみたいのだ。

勿論、この作品を読んで、ある種の理想主義にうたれるということはある、これは筆者のみならず多くの研究者が声をともしして下さる事のようなので、全く筆者の主観的感想という訳ではあるまい。

だがそれならこの書き手は、理想主義的な己を現出させたかっただらうか？ 勿論そう考えても良く、我々は現実世界の人シュティフターが、理想などというものを語る事が相当に困難な歴史的／個人的境遇にあったことを、手近な伝記でも何でも知ることが出来る。だとすれば彼はそうした境遇にあって現実の身体と、「書き手」の身体の分離を行なって、「書き手」の方に、理想主義的な作品の書き付けという作業を委ねたと解釈できるだらうか。

そう言っても良いかもしれない、しかしそう言い切ろうとすると、何か筆者の中で抵抗するものがある。その抵抗の根を探してみると、「理想主義」という言葉に引っ掛かりがあるようだ。そして今更ながらにこの「理想主義」という言葉に何らまともな規定をしていなかった事に気付く。いったいこの書き手にとっては、何が「理想」なのだらう。

まず思いつくのは政治的な意味で、共同体というものの在り方についての「理想」ということである。この村の共同体は、これも多くの論で考証されているとおりある種の永続的／循環的持続をする自然と同様のもののように描かれていて、その点から考えれば先程の(二)の共同体の物語が(三)の自然の枠に包まれている事はすんなり理解できる(逆に言うと、だから(三)の枠は最後で閉じていると筆者は解するのである)。そうだとすると(一)の兄妹の物語は、その自然の如き共同体を持つ自己修復作用の一つの例として読むことができよう。

しかしこの解釈で全体を読むには一つ難点があって、それは、こう解釈すると兄妹の死と再生、そしてそれによる母(更には父)の共同体への受け入れという(この点にも多数論がある)核心の物語が、いかにも自然作用の「コマ」という感じになり、余りにもぼやけてしまうという点である。人間の営みのすべては自然の作用だと断定する極端な自然科学者ならこの読みに同意するかもしれないが、筆者には、やはり、こういう要素もあることを認めながらも、全面的にこの見方を採る事は出来ない。もう一つは、(一)の死と再生の物語を、(四)のクリ

スマス物語の枠の中に入れて（これも従って（四）が最後で閉じていると筆者が見る根拠なのだ）、再生、生まれ直し、という局面に力点を置き、人間の存在としての理想形を生まれ直しによって（作品中に於いてであれ）実現させ、さらにはその再生を（キリストの誕生）と重ね合わせる事によって——何しろこの（一）の物語はクリスマススイプから翌朝にかけての物語なのだから——より晴れやかな、従って存在の生成としてより望ましいものにするという考え方である。

これはさらに推測を重ねれば、「書き手」自身がこの物語を（創作）することにより、再生に立ち会ふ、ということとはまた自らも再生するのであり、読み手もまた同時に立ち会ひによって自ら再生することを期待されているのだ、とでもいう風に考えを繋げていくこともできる。そしてその再生に立ち会ひ、体験し、自ら生まれ直した読み手が味わうものを感動と名付けるならば、それはある種の意味で理想主義的な感動といえようから、読み手がそこでこの作品に「理想主義」を見るのはもっともなことだ、とも考えられる。

しかしこの考え方にも難点があって、（三）の村と自

然の枠が、かなりはっきりと単なる背景に退いてしまう。そこで今度は物語の細部に着目してみよう。すると、嫌でも目を奪われるのは、この物語の中で執拗に繰り返される反転である。

例えば村の南にある雪山については、「ほとんど家々の屋根のすぐ向こうにあるように見える」が「実際にはそれほど近くない」（187）。またその山の二つの頂きは夏に雪が解けると「村人の言い方では黒く天に聳える」が「実際にはそれらはほんやりとした空色をしている」（188）。また谷間の中程に立って見ると、「この盆地には入る道も出る道もないように」見えるが、「実際はさまざまな道が通っている」（192）。

こうした反転が他にも数多い中でその最も大きなものは、共同体の中で、何となく余所者（Fremde）のように思われていた母（198）と兄妹（200）が、真にその村の人間になった（239f.）という転回である。

ここに筆者が見るのは、語り手の、恐ろしく強い訂正欲求である。Aと見えていたものは実はBであった。これは子供たちが死と再生を通じて実現した変貌でもあるが、それがありとあらゆるレベルで繰り返される事には、

語り手にそう語らせている(語り手は作中人物であるから)書き手の、執念とも言えるほどの強烈な訂正欲求が透けて見える。

この書き手は何をそんなに訂正したいのだろうか。実は自分の人生を生きそこなった、生きそこなってきたとでも(無意識にでも)思っているのだろうか。

こういう推測は、あまり文学的ではないかもしれない。文学作品の世界が現実界と接する界面にいる「書き手」にわざわざ「現実」の身体を与える事、即ちあえて仮想的な現実空間を読み手の都合で創る事だからである。もしこうした仮想現実空間を創るならば、それは歴史的に現実的な存在のシュティフターという人間について歴史的に認識しようとする限りの試みをし、そして読み手の創る仮想現実空間のシュティフター像を、歴史現実空間の作家シュティフターの歴史的事実でなるべく無理なく構築できるように、すり合わせを進めていくにしくはあるまい。

しかし本論ではそうした作業は置いて、作品空間の中からのみ『水晶』の書き手を見ていこうと思う。そうすると、我々の眼前に現われるのは事柄の見掛けを否定し

見えていなかった、真実を提示するという語り、あきれほど執拗に、しかも周到に進めさせていく書き手の、単に文学的な身体のみである。これは一見して実につまらないものかもしれない。しかし、ここにもまた別の考え方を導入する事が出来る。今まで見ていると思ってもちゃんと見えていなかったものを、改めてちゃんと見せる。見慣れたと思っていた姿を新しい姿に変えて見せる。これこそは文学のごく基本的な条件ではないだろうか。

あるいはこういう言い方をしても良い。言語というものはある事柄を固定した記号に変換するシステムという性質を(少なくとも一部は)持っているから、従って時間軸の上では常に新しくなってゆく筈の世界の万物をどうしても既知の枠組みに押し込めてしまう傾向を持つ。(このことは例えばムージルの『特性のない男』でモースブルガーについて散々議論されている所である⁽¹⁰⁾)。しかし一方で人間は、勿論傳統を尊ぶ面も持ちながらも、更新を求める生き物である。それは恐らく我々人間が時間制約として背負っているからであろう。そこに言語芸術が芸術として発生する必然がある。固定した枠に押

し込めるといふ機能を本来持っている記号的なものとしての言語を用いつつ、何かしらの意味で新しいものを立ち現われさせるものが文学である。だとすれば、この『水晶』の書き手の一種不可解な欲求と見えたものも、実は単純に、純粹に文学的なものと言うことが出来るのではないだろうか。

そうしたダイナミズムをもった「書き手」はひたすら、見掛けを否定し真なるものを探っていく。そして子供達は死と再生によって、本来的な姿に立ち戻っていく。それはあたかも自然がさまざまな循環や波動を繰り返しながらも自己完備した姿であり続ける事に一見矛盾するようだが、実はこの自然も時間の中に立っている以上、一瞬一瞬新しいものなのである。(そのことを我々に痛感させてくれるのは『晩夏』なのだが、ここで詳述することはできない)。するとその自然の枠を包摂する「クリスマス」という枠の意義も明らかになっていく。もちろんそれは年毎に繰り返すものであるが、それ以上に、そのたびに新しいということなのである。クリスマスのプレセントと、それを期待し発見し「きらびやかにまたたく光の輝きのなかで見る」子供たちの描写がされ、それ

らの贈り物が「子供たちがありったけの想像力で思い描いた事を、はるかに越えて、⁽¹⁾」のも、それ故にと言えよう。そしてこの物語全体もまたクリスマスの「贈り物」(128)であり、そうしたものとして教会の鐘の音と共に終りで閉じているのである。

こうして「書き手」からの贈り物とされた物語は読み手のもとへ届けられる。それが我々の「想像力」を「越えて」いれば、書き手は、その文学的使命を果した事になる。その成果には称賛が与えられてよいであろう。そして、実際これまでも多くの称賛が与えられてきた。だがそれは、作家シュティフターに向けられることが多い。そして彼について多くの評言が語られ、伝記が書かれ、研究もされている。それは作品内世界から見た書き手をより深く理解し、あるいはその身体の在りようを思い描く助けにいつかなるだろう。

だがそれでも、歴史的存在としての、「作家」としてのシュティフターが、その称賛を隣接によって、換喩関係を媒介して、受けているのはやはり事実である。とはいえこれはそのシュティフターをいささかもおとしめるものではない。⁽¹²⁾彼の最大の功績は、この我々の住む歴史

的世界に、この「理想主義的」な「書き手」を生まれさせ、定着させた事であり、それは歴史的世界にとつてはまた、何にも代え難い事であるのだから。

本稿は一九九九年十月十六〜十七日に徳島大学で開催された日本独文学会秋季大会、十一月五日東京外国語大学に於ける国際シンポジウム『言語』の二一世紀を問う、十一月十三日一橋大学で多和田葉子氏を招いて行なわれた国際交流セミナー「境界を耕す」に筆者が聴き手として参加し、さらにそれぞれの後の懇親会等での議論に触発されたことの結果書かれたものである。ここでそれぞれの準備に携わったり、発表・討論に加わったり、その後の席で話を聞かせて下さったり議論して下さったりした方々に心から謝意を表す。

なお以下では次の略号を使用する：AS=Aldalbert Stifter；St=Stifter；BK=Bergkristall；BS=Bunte Steine；VJ=Vierteljahrsschrift des AS-Institutes des Landes Oberösterreich；なお紙数の都合で文献は選択的に引用した。

シュティフターの作品のテキストとしては、AS: Werke und Briefe, Hist.-krit. Gesamtausg. Hg. v. A. Doppeler u. W. Frühwald, Stuttgart 1978 ff. [批評版] を使用し、特に「BK」については、Bd. 2: Bunte Steine, Buchfassungen. Hg. v. H. Bergner, 1982 を主に使用すると共

に、AS: BS und Erzählungen, Disseldorf/Zürich 1996 [アルテニス版] も随時参照し、そのK. PornbacherによるAnmerkungen, U. JoppによるNachwortも参考にした。またBKの引用・参照については、批評版の頁を、本文中では括弧に入れて示し、注では頁数のみで示す。また注で参考文献を引用する場合には、後の文献表にあるもの場合、著者の姓と頁数のみで示す。同著者の文献が複数ある場合、刊行年を付す。それ以外は通常通り記載する。

(1) もちろん本論はある極論である。だが、極論は理屈としては間違っている事が多い、あるいは殆どであるにしても、現実的には極論がないと議論が進まない事も多い。それは一人の人間の思考の中においてもそうである。したがって筆者は今ある極論を書いてみた。次に(あるいは以前に)これと大きく矛盾する事を書いていたとしてもそれはまた別の極論なのだということで、微笑をもって御寛恕頂きたい。なお語り手については、Irmischerの実に周到な論、また欲望と関わせて特に「晩夏」について石光一九八四の卓越した論があるのだが、現在の筆者にはこれに何かを言う準備も能力も無いので、今回はコメントを避ける。なお「書き手」については、筆者は主に『物語文学の方法I』(有精堂一九八九)の第一部に収められた三谷邦明の源氏物語論を中心とした結論に著しく啓発された。但し同書一八六頁の〈補記〉によれば、三谷の論にもさまざまな批評があるようであり、この問題の複雑さを推測させる。それについては東原伸明「源氏物語研究の新しいテー

「マ集50」〔国文学〕(学燈社) 1999. 4. S. 136-143) が参考になる。

なお本論は昨年本誌三月号、九月号に掲載したトーマス・マンの『選ばれし人』に関する論文で未だ論じないままに先送りになっている書き手の問題をまず別の作品を介して考察するという役割も担っているので、興味のある方はそれらも参照していただけると幸いである。

(2) Vgl. Roedel, S. 53.

(3) このことについて、筆者の仕事は論文書きであるから、最も痛切に感じさせられるのはそうした論文を読んだ時である。従って本来はその例を示すようなものを挙げたい所であるが、論を論の対象として名指す事は、文学研究者(4)としての筆者には、それこそ何故とは言いが抵抗がある。但し、此処に参考文献として挙げてあるものは、実はそうしたものが含まれている可能性が大なので、それとなく了解され、筆者の此処の論旨を確認したいという奇特なご意志をお持ちの読者には一読をお願いするものである。

(4) 「ちゃんちゃらおかしい」という事については次を参照。加藤典洋『逆行の弁——『敗戦後論』前史』、『本』(講談社) 1997. 8. S. 6-7)

(5) この点については Whiton が非常に詳細に分析しているので、殆ど付け加える必要を認めない。ただ S. 276 [Why did Stifter so subtly yet inextricably fuse all these elements together...] 以下で、インタテクスターが

これを書いた動機、という形で分析を進めている部分は、筆者の考え方とは一致せず、一方 Sinter は、子供たちが通る峠道の鞍部である「くび」の「遭難柱」が死の象徴である事を指摘し(2)、ズザンナが見た極光らしき光を「キリスト様」だと思った事が奇蹟を経験したという確信の現われだとするが(1)、こうした象徴分析の方がむしろ筆者の感覚には適合する。(南独やオーストリアでは Christ-kind という言葉がクリスマススの贈り物を意味するということは、こうしてみると驚くべき事である)。なおシュテイファターの象徴表現については、石光一九七六参照。

なお付言すれば、この山での彷徨は一種の冥府行であるとも考えられる。冥府行が常にそうであるように胎内回帰であり、死から再生への過程であり、通過儀礼ではあるのだが、ただしこの冥府行は第一に上方に向かってひたすらなされるものである事、第二に、予め語り手によって俯瞰的に描かれた道程(188頁)を吹雪の中盲目的にたどるものである(212-7)事によって、普通のものとは大きく異なっている(彷徨の内実については、川東、九八頁参照)。冥府行は元来、近代的意味では自我が完全に失われた状態で、なお人々が在るのを訪ねる道行きであり、またその際に訪れる世界は当然人智の及ぶべくもないところであるので、やはり正確には『水晶』のそれは冥府行ではない。子供達が訪れるのはそれなりに賑やかな死者達の世界ではないのだ。其処は純粹な死の世界である。この点については Struc が "the threat of the absolute nothingness on

the mountain" (326) と言っていて、それが家庭秩序からの離脱ばかりではなく、その「Time and space have now become elusive concepts obliterated by the snow" (ibid.) なのだと言っている。トーマス・マンの『魔の山』の「雪」の節との対比を試みている。

山の自然、特に植物も何もなくなって岩と水ばかりになった世界は、普通の意味での生命は存在しない、純粋な死の世界と言っている。だがその純粋な死とは何か？ 人間の〈身体〉と〈なきがら〉を分かつ一点、そこに何者かを宿らせている本当に微妙な生命というものの有無に関わるものと言っているだろうか。しかしこの完全な死の世界から子供達はまた生の世界に生まれ直してくる。これは出産の際に産道をくぐるのと同様の極めて困難なことであり、この子供たちに充分な自己に対する確信がなければ不可能な事と思われる。「子供」であることの意味については川東、九七頁を参照)。その点から考えればこの兄妹は一体として、一つの人格として生まれ直しの旅をするのであり、妹が繰り返す有名な「Ja, Konrad」という言葉は、全く自己確認のためのもの以外の何ものでもないように、筆者には思える。(なおこの言葉は多くの文献で十七回言われると書かれている。一部の文献では数え方が違うようだが、筆者の勘定でも、十七回で良いと思われる)。その点については谷口、三三三頁にも記述があり、後の注でまとめて触れる。Küpper, S. 180 f. ではこの兄妹の会話が「Dialog」でないと妥当に指摘したのち「Ja, Konrad ist

der feste Grund, auf dem sich sprachlich die spätere Rettung der Kinder aufbaut, ja mehr noch—ihre Gespräch ist ihre Rettung" (181) と述べているが、これは恐らく、死と再生の過程で生まれ直すのは自分、かつ自分で生まれ直すしかないということを意味しているのだと筆者には読める。なお前田、一九〇頁以下はこの点を技法の観点を中心に扱っている。

(6) この枠の問題、特にクリスマスの枠の意味については、谷口、一九頁以下で詳細に論じられている。枠、四五頁でも物語の最後におけるこの枠の意味が論じられるが筆者の解釈とは異なっている。Schmidt, S. 334 ㉔, "Wie die Kinder vom Berg zurück ins Dorf gebracht werden, übertragen sich auch die Bilder des Weihnachtsmysteriums wieder ins Tal." と言われるのは、やや不明瞭ながら、筆者と同様のことを言おうとしていると思われる。

(7) 本来枚挙に遑がないのだが、例えばは Küpper, S. 178 6, "Sie [—die Erzählung] ist einfach, rührend und anspruchlos." などという評語を挙げておく。

(8) これも非常に例が多いが、一つだけ挙げれば、既に触れた通り Whiton が、共同体の理想をこの作品の結末に見ている。

(9) まず父について言えば、多くの論者が事件の前の父の態度にヒュブリスを見て取っていて、例えば谷口、十一頁では妻と子供たちの状況もその父の問題から同心円として広がったものと見られている。そして同二五頁では共同体

との対比においてそのヒュプリスは罪に値するものと考えられていた。そして三九頁では、「クリスマスに子供が救われ、その為に大人も救われる」という結果に終わる物語といえよう」とまとめられている。この作品が、こうした父の罪を子が贖うという要素を持っている事に異論はないが、ただこの理解からすると、世界は全く父を中心に動くのみという事になる。しかし母や二人の子供は全く受動的な立場だけに留まるのだろうか。恐らくそれぞれに世界の中心でありうる筈である。それはいかになされているのか。筆者は、母親がクリスマスの前日の朝、かなり慎重ながら子供達に祖母の家の訪問を薦めている事、そして子供達が現に帰り道に「Ja, Konrad」という言葉で自己確認しながらも、そのたびに深みに：ではなく高みにはまっていく事、この二点が結構恐ろしい意味を持つと考える。この点については（佐原、十六頁でも指摘されている通り）Timmersher (165) がニーチェの「コペルニクス以来人間は斜面上に置かれていくように思われる——今となってはますます早く転がって中心点から離れていくようだ——どこへ？ 無の中へ？」という『道徳の系譜』の一節を引用していることも非常にうなずけるのだが、しかしそこから最後にこの融和に持っていく書き手の膂力は何に由来するのだろうか？ こうした問題に関しては小林恭二「父という物語」『波』（新潮社 1999, 9, S. 40）を参照。

(10) 勿論実際にはモースブルガーの件だけでなく、非常に多くの問題がそこに繋がっているようである。それを推測

させるものとしては、例えば次の緒論を参照。円子修平・R・ムシル『特性のない男』（I）〔東京都立大学「人文文学報」162, 1982, S. 91-109〕、堀田真紀子・比喩とモラル——ロバート・ムージルの『特性のない男』について〔北海道大学言語文化部紀要33, 1998, S. 167-193〕、同：醒めた恍惚——『特性のない男』の感情心理学に関する覚書 その1〔同36, 1999, S. 71-96〕。

(11) 谷口、三三頁では先に(5)でも触れたKüpperの評を引用し、「絶対の信頼を基盤としてそこにこそ恩寵は贈り物として置かれうる」と述べられる。そして三八頁では「こうした地味な作品を世に贈った」と書かれる。これを読み手に対する贈り物と見る点には筆者も同意するが、筆者がそれを純粹に文学的な贈り物として見てしまうのは、筆者の性質によるものであらうと自分で思う。

(12) 文学が己を歴史から分かつのは、一にも二にも想像力の産物だということであろう。ではその想像力の主体は何か？ 筆者はそれこそ「書き手」なのだと思う。「語り手」は既に想像力の産物であり、そして産物である世界を語る。界面の外にいる「作家」に対しては、ある関係——換喩関係を通じてその想像力を讃嘆でき、本の印税の受け取り手になったり榮譽を受けたり、場合によっては告訴されたり投獄されたりする事がなされうるし、現になされてきた。しかしそれは文学の側から見ればあくまでも換喩的關係なのであって、文学作品（敢えて作品という言葉を使う含意は、それを作られたものとして見たいという点にあ

るが)に於ける「想像力」の帰せられる先は「書き手」でしかない。読者にとってはそれで充分である——というよりはそれは真実である。換喩関係からさらにイコールで作家を結び付けてしまう事は、歴史的・現実的・政治的世界では(正しい)ことであり真である事かもしれない。しかし純粹に文学である文学を読む読者にとっては、実は「書き手」のみが居るのであり、そこには「作家」は換喩関係でのみ存在するだけの事の方が真なのである。これは文学は文学として以外には存在しないという見方であり、文学はあるコンテキストで捉えている人々にとっては認められない、あるいは許しがたい事かもしれない。だがこの見方で文学を文学としてのみ捉えている人にとっては、逆にそうしたコンテキストの中におかない事、想像力の産物である事のみを認める事が、むしろ倫理的で絶対的に決定的なのである。

《参考文献》

- (一) 邦文文献
- (A) 単行書
- ・小名木榮三郎：自然と対話する魂の軌跡——アーダルベルト・シュティフター論——〔慶應義塾大学法学研究会発行、慶應通信発売、一九九四〕
 - (B) 論文
 - ・石光泰夫：「アプディアス」論——初期シュティフターに於ける象徴表現の一考察——〔阪神ドイツ文学会「ドイツ文学論攷」18 1976, S. 51-68〕
 - ・石光泰夫：アーダルベルト・シュティフター『晩夏』——物語の消滅と復元をめぐる物語——〔大阪大学言語文化部「言語文化研究」X 1984, S. 191-212〕
 - ・角洵：『水晶』——クリスマスの贈り物——〔甲南大学紀要文学編〕62 1986, S. 1-18〕
 - ・川東雅樹：退屈、リアリズム、そして幻想——シュティフターの「水晶」について——〔秋田大学教育学部研究紀要人文科学・社会科学 38 1988, S. 99-100〕
 - ・小松原千里：『水晶』について〔神戸大学「ドイツ文学論集」19 1990, S. 157-171〕
 - ・佐原雅通：シュティフターの『水晶』について〔中大大学院「Studie」14 1987, S. 1-32〕
 - ・須永恆雄：シュティフター覚書(一)——『水晶』繙読——〔明治大学教養論集〕218 1989, S. 37-54〕
 - ・椿鐵夫：『水晶』における「遭難柱」のモチーフについて〔大阪市立大学「人文研究」38-1 1986, S. 35-49〕
 - ・古井由吉／佐伯一麦：受難と純心「波」(新潮社) 1999, 2, S. 68-71〕
 - ・前田彰一：シュティフターの『水晶』について——小説技法の問題を中心に——〔ドイツ文学における古典と現代——登張正實先生古稀記念論文集——〕(第三書房) 1987, S. 177-197〕
 - ・谷口泰：『水晶』——贈られた言葉——〔上智大学ドイツ文学論集〕11 1974, S. 3-42〕

(33) 「書^キ手」の成功と作家

- (11) 英文文献
- (A) 津江謙(全覽)
- Lukas, Wolfgang: Novellistik. In: Hansers Sozialgeschichte der dt. Lit. vom 16. Jh. bis zur Gegenwart. Bd. 5, Zwischen Restauration und Revolution 1815-1848, München/Wien 1998.
- Martini, Fritz: Dt. Lit. im Bürgerlichen Realismus. 1848-1948, 3. Aufl., Stgt 1974.
- Martini, Fritz: Dt. Literaturgeschichte, 17. Aufl., Stgt 1978.
- Plumpe, Gerhard: Roman. In: Hansers Sozialgeschichte der dt. Lit. vom 16. Jh. bis zur Gegenwart, Bd. 6, Bürgerlicher Realismus und Gründerzeit 1848-1890, München/Wien 1996.
- (B) 津江謙(ナリトヤトキ一)
- Irmischer, Hans Dietrich: AS. Wirklichkeitsfernung und gegenständliche Darstellung; München 1976.
- Naumann, Ulsula: AS, Stgt 1979.
- Roedl, Urban: AS. mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten, 14. Aufl., Reinbeck bei Hamburg 1994.
- (C) 羅文(Butte Steine)
- Blackwenn, Helga. ASs „BS“. Versuche zur Bestimmung der Stellung im Gesamtwerk. In: Vj. 21 (1972) F. 3/4, S. 105-117.
- Lange, Herbert. „Ich mußte mein Herz erleichtern“.
- AS über Ludwig Richter und dessen Titelzeichnungen zu den „BS“. In: Vj. 17 (1968) F. 3/4, S. 93-107.
- Stopp, Frederick: Die Symbolik in Sfs „BS“. In: DVjs. 28 (1954), S. 165-193.
- (D) 羅文(Bergkristall)
- Küpper, Peter: Literatur und Langeweile. Zur Lektüre Sfs. In: AS. Studien und Interpretationen. Hg. von L. Stiehm, Heidelberg 1968, S. 171-188.
- Schmidt, Hugo: Eishöhle und Steinhausen. Zur Wehnachtssymbolik in Sfs „Bk“. In: Monatshefte (Wisc-onsin) 56 (1964), S. 321-335.
- Schwarz, Egon: Zur Stilistik von Sfs „Bk“. In: Neophil. 38 (1954) S. 260-268.
- Sinka, Margit M.: Unappreciated Symbol: The Unglücksssäule in Sfs Bk. In: Modern Austrian Lit. v. 16 (1983) n. 2, S. 1-17.
- Struc, Roman S.: The Treat of Chaos. Sfs „Bk“ and Thomas Manns „Schnee“. In: MLQ 24 (1963), S. 323-332.
- Whiton, John: Symbols of Social Renewal in Sfs Bk. In: GR 47 (1972), S. 259-280.
- (E) 羅文(聖の生涯)
- Böll, Heinrich: Heinrich Drendorf aus AS „Der Nachsommer“. In: Leporello fällt aus der Rolle. Hg. von P. Härling, Fkt/M 1971, S. 122-129.